

月夜の照らす 怪物



江口 祐介



バチバチと火の子が飛ぶ音。

じりじりと頬をくすぶる熱で僕は浅い眠りから目覚めた。

「ちょっと、疲れちゃったね」

女性の声が、脳裏に残った夢の余韻から現実に僕を引き戻す。

どんな夢を見ていたかは、その瞬間に忘れてしまったけど、きっと今の僕自身を夢見ていたんだと思う。

疲れているんだと思う。

地面にあぐらをかいていたら、ついうとうとして、いつの間にか寝てしまったんだ。

どれぐらい寝ていたんだろう？

僕はゆっくりと顔を上げ、声のする方向、たき火の向こう側にしゃがみ込んだ女の人の顔を見た。

白く透き通った肌、首の後ろで赤い帯で結った銀色の長い髪、まるでドレスのようにも見える赤いローブに、蒼水晶の埋め込まれた銀のネックレスに、同じく赤い手袋。

瞬間、目と目が合い、優しさを浮かべた蒼水晶の色と同じ吸い込まれるような蒼い瞳に、胸が高まり詰まるような息苦しさを感じた。

僕はなぜだかたまらなく恥ずかしくなり、目をそらしてたき火の中を見た。

薪は静かな炎を宿して力強く燃えていた。

「うん・・・」

僕は彼女と目を合わせず彼女の向こう、西日に真っ赤に染まったアナマ連峰を眺めながら言った。

もう夕方になっているらしい。

「そう」

それは彼女のよく口にする言葉。

彼女がこの言葉を口にする度、僕はちょっと切なくなる。

その言葉は僕のことを優しく認めてくれているようであり、同時に僕のことを諦めて見捨てているように冷たく感じもする。

今のはどういう意味なのかな・・・？

僕は下から顔色をのぞき見ると、向こうも僕のことを見ていたのか、再び目と目が合って微笑まれた。

「どうしたの？」

「なんでもないよ」

僕はほほえみ返しながら言った。

僕は立ち上がって彼女に背を向けて、アナマ連峰に向けて少し歩いた。

何処までも続くような草原に、大小さまざまな岩がまるで円を描くように並んでいる。

僕はその内の平べったい大きな岩に乗っかろうと、ジャンプして手をかけると一気に上った。

僕の身長と同じぐらいの大きな岩だけど、この広大な草原からしてみればほんの石ころなんだろうな。

遠くを見れば見るほど、ちっぽけな自分のスケールに気が付く。

草原の果て、夕日に包まれた山は目に見える限り何処までも、まるで世界を覆う壁のように連なっている。

世界の壁、その言葉を子供のころから聞かされていたけど、こうしてそとから見ると本当に壁のようだった。

「マハラードの神とカルタスの神に祝福された、何人も犯すことの出来ないこの世の果てなる世界の壁、アナマ霊峰。

我らの世界。

神々が帰るべきこの山を護るは、神の印を背に焼き付けられた、屈強なる我らアナマの民。 神が与えられたこの時間、神のために使うが我らが宿命ぞ」

僕はふと無意識のうちに口にしていた。

「山守の誓いよね？」

後ろから彼女の声がした。

「まさか、聞いていたの？」

「実はばっちりと聞きちゃったわ」

独り言を聞かれていたなんて、恥ずかしくてたまらないよ。

思わず耳が熱くなった。

きっと、僕の顔は真っ赤になっているんだろう。

「アナマに生まれた男の人は当たり前のようにみんな言えるんだ。

学校で毎朝言わされて育ってきたからね。

だから油断すると口にでちゃう。

本当は言いたくないんだけど・・・」

「そう」

彼女はそう言うと岩に上ろうとするが、思うように手が届かなくて上ることができない。

一生懸命ジャンプしても、全然手が届かないんだ。

彼女は自分からしてみたら、長い間旅をしているし、いろんなことを知っているから、大人っぽく思っていたけど、こんな彼女を見ていると、なんだかかわいく感じる。

そんな彼女を見て僕はほほえみを浮かべていた。

「そんなに私が上がれないのがうれしいの？」

ちょっと怒っているかも。

「ううん。

そんなわけじゃないんだ」

ただ、かわいいから見ていたいなって、思っただけだよ。

そう思ったけど、僕は口に出すことはなかった。

僕は手を差し伸べると、彼女はそれに答えて僕の腕を強く握った。

手袋の上から彼女の暖かい体温を感じた。

「よいしょ」

僕が引っ張ると、彼女は岩に手をかけて身軽に上った。

「ありがとね」

彼女は言うも岩の上で大きく延びをした。

草原を柔らかい夏の風が吹き抜けて、草原の草木を揺らしてサァッと音を立てる。

彼女は風に髪を撫でられ、その柔らかい銀色の髪をなびかせながら、遠い目で赤く染まったアナマ連峰を眺めた。

彼女はその蒼い瞳の向こうに何を見ているんだろう？

「あの山のふもとに君の故郷があるのね」

「うん」

僕は遠くを見ながら言った。

「隣、座って良い・・・？」

「いいよ」

彼女が僕の横に膝を抱えて座り込んだ。

肩と肩が擦れ合った。

僕はドキッとすする。

すぐ間近に彼女の体温を感じる。

速まる心臓の音、息の音、もしかすると聞かれるかも知れない。

横を向けば彼女はそこにいる、そう思うとますますどきどきして、僕は横が気になるのを無視して不自然なまでに遠くを見つめた。

「アナムから、結構離れちゃったね。

もう、3日も歩き続けているんだものね」

「まだ、3日だよ」

僕は言った。

「帰りたい？」

何でそんなことを聞くのかな・・・？

僕は間近に見える彼女の顔を見た。

彼女も僕を見ていたらしくて目があった。

目があっても視線を反らさず、僕はじっと彼女の目を見続けた。

その瞳の向こうには、まだ何も見えない。

「帰りたくないよ・・・！」

離れたくないって、もしかするとそう思ったのかも知れない。

自分でも解る程度の少し強い口調になっていた。

「村が嫌いなの？」

極端な彼女の質問に僕は驚いた。

自分でもそこまでは思っていないよ。

「そんなわけじゃないよ。

・・・ただ、村にいと退屈なんだ」

僕は声を落ち着けて言った。

「そう・・・」

彼女は黙って僕の話の聞いている。

「退屈だからと言ってやることがない訳じゃないんだ。

学校に行って、山守の誓いを言って、おじいちゃんの農業の手伝いをして、あとは疲れて寝るだけ。

明日はまた同じことの繰り返し。

いつか学校を卒業しても、山守になって、今とそう変わらない毎日を過ごす。

村で過ごす変わらない日々が退屈なんだ。

本当はもっとやりたいことがあったはずだけど、いつの間にかにそれも忘れて、何も出来ずに毎日があっという間に過ぎていく。

何も出来ないままいつか年をとって死んでしまう。

僕はそれが怖いんだ。

そんなんじゃない本当に生きているんだか解らないから」

彼女はゆっくりと口を開く。

「旅をしていても生きるために働かないといけないのは一緒。

旅人は街から街へと渡り歩き、物を売っては買って行商をしてお金を稼ぐの。

お金がなければ食べることは出来ないから」

気が付くとあたりは暗くなり、薄い闇の中にいくつかの星が輝きだした。

瞬く間に日は沈み、一面目の回るぐらい見渡す限りの星空になる。

人工の光がないとても綺麗だ。

僕らは火を囲いながら、携帯した食材に火を通して口にする。

夜になると肌寒く、少し水っぽいけど暖かい麦飯がおいしく感じる。

「さあ、ご飯も食べ終わったし、そろそろ寝ましょうか」

そう言って彼女が電気式のカンテラを消すと、闇夜を照らすものは月光りと消えかけたたき火だけとなった。

さっきまで灯りがあったから気が付かなかったけど、暗くなってさっき座っていた円状に並べられた岩がわずかに青白く光っていることに気がついた。

「岩が光っているよ」

「・・・ちょっと、近づいてみましょ」

彼女はカンテラと護身用のナイフを手にすると岩に向かって歩き出した。

僕もその後続く。

10メートルぐらい離れたところの岩陰から光る岩の円を見ると、円の中央で青白く光る人影がいることに気が付いた。

蝶のような羽が生えた綺麗な女の子が踊っている。

「妖精・・・？」

僕は小声で彼女に聞く。

「ううん、違うよ。

岩に焼き付いた大昔の人の記憶の残像よ。

きっと、前はこの辺に村があって、その村のお祭りの様子だと思う」

「ふうん・・・」

まるで妖精のような不思議な服装、幻想的な踊り。

僕はしばらくその昔の人の踊りに魅入っていた。

「実はね、私、踊ったことないの。

小さい頃から旅暮らしをしていたし、華やかなこととは縁がないのよ。

街の酒場で人が踊っているのは見たことあるんだけど・・・」

「踊り、上手そうなのにね」

僕は思ったままいった。

「そ、そうかなあ・・・？ それより、君は踊ったことあるの？」

照れを隠しながら彼女が聞く。

その照れ笑いが僕の心を掴む。

「盆踊りだったらね」

「盆踊り？ 聞いたことがない不思議な響きね。

きっと、素敵な踊りなんでしょうね」

僕は彼女の言葉に思わず笑ってしまう。

「盆踊りはあんまり素敵な踊りじゃないよ。

ご先祖様に贈る古い村の踊りなんだ」 彼女は期待に満ちた目で言う。

「踊ってみてよ」

「ええっ！ 恥ずかしいよ！！」

「下手なの？」

「そうじゃないけど・・・」

「じゃあ、踊ってよ！」

彼女の目はまっすぐ僕を見ていた。

まじまじと見るとかわいい顔をしている。

僕はドキッとする。

「わ、わかったよ」

僕は目をそらしながら言う。

「やったー！」

そして、僕は盆踊りを踊り出した。

奇妙な手つき、奇妙な足取り・・・。

何を表しているやら全く解らないこの踊り。

毎年毎年踊らされ続けた僕の体には、すっかりそのリズムが刻み込まれていた。

僕の踊りを見ていた彼女は吹き出した。

「キャハハ・・・！ おもしろい踊りね！ とても不思議な踊りで素敵よ」

そう、自信があればあるほど、この踊りは恥ずかしい。

踊り自体が妙ちくりんで恥ずかしいから。

僕は顔が真っ赤になった。

「ねえ、他の踊りは踊れるの？」

「そういえば学校の運動会の時に踊ったなあ・・・」

名前はなんだか忘れたけど、女の子と手をつないで踊らされて、凄く恥ずかしかったのを覚えている。

「一緒に踊ろうよ！」

そういうと彼女は僕の手を握って引っ張った。

手袋を脱いだ彼女の手は暖かくて柔らかかった。

不意を付かれたからものすごくドキッとした。

口から心臓が飛び出すんじゃないかって思った。

僕は学校で踊ったリズムを思い出しながら、彼女をリードして踊る。

彼女の手を持ち、ステップを踏みながら、引き離したり、引き寄せて腰に手を回す。

彼女が踊ると彼女のその長い銀髪が宙に舞い柔らかいにおいを漂わせる。

間近に見える彼女の顔、つないだ手と手、密着した体。

彼女の体温を、存在を体中で感じる。

はじめはとても恥ずかしくてガチガチだったけど、次第にリズムに乗って楽しくなってきた。

僕らはきらめく満天の星空の元、この大地を舞台に、虫たちの鳴き声にあわせて踊った。

とても彼女が愛おしく、そんな愛おしい彼女を近くに感じる。

そう思うと幸せでたまらなかった。　こんな時が永遠に続けば良いとそう思った。

だけど時は瞬く間に過ぎていく。

まるで夢のように・・・。

二人だけのダンスパーティの後、テントの中で僕は言う。

「僕は、村にいるより、君と旅をしている方が楽しく思うよ」

真っ暗で見えないけど、僕は彼女の方を向いた。

「それは旅をして心の中の自由を知ったからよ。

生きるためには働かないといけない。

大切なのは生活に自由を求めることよりも、生活の中で自由な心を持つことだと思う。

心の中に自由さえあれば、たとえいっぱいいっぱいでも、いろんなことを新鮮に感じていられるから」

「僕は君の後を追って旅を始めたけど、それがあまりに楽しくて、幸せすぎて、まるで夢のようで、いつか夢から覚めたら村にいていつもの生活が始まるんじゃないかと

不安だったんだ。

村での生活が夢なら良いのになって、3日間ずっと思っていた。

でも、いつまでも旅ができる訳じゃない……。

夏休みが終われば学校に行かないといけない。

いつか僕が村に帰る時が来て、君と別れる時が来るって考えると辛いんだ……。

……考えたくなかった」

僕は自然に涙が出ていた。

僕は嗚咽を殺して言う。

「でも、これはいつかは覚める夢なんだ……」

ずっと彼女は僕の髪を撫でた。

その優しさに僕はよけいに涙がこぼれた。

「今はまだ覚めれば終わってしまう夢かも知れないけど、でも、夢は追い続けて適えることができる。

夢を叶えるのは辛いかも知れない。

でも、心に自由と負けない強さがあればそれを現実にすることも出来るのよ！」

彼女は僕の涙で濡れた両頬に両手をあてる。

そして、その次の瞬間、僕の唇に柔らかいものが触れた。

目の前に彼女の顔があった。

僕は彼女のその手を強く握る。

「一人での旅よりも君との旅が楽しいから。

だから、私、君がいつか追いついてくるのを待っているからね。

だから強くなってね……！」

「……」

僕は彼女を強く抱きながら声を殺して泣いた。

やがて泣き疲れて寝てしまうまで。

明日になっても夢は続くだろうか？

夢だと解っていても、今はまだ夢を見ていたい。

やがて、夢が覚め現実に戻ったとしても、僕の心にはその思い出は残る。

だから僕は強くなれる。

夢を夢で終わらせない為に……。

もう一度、君に会うために……。

無理矢理に目をつむれば、悪夢のような現実が脳裏に浮かぶ眠れない夜。

月明かりすら照らす事の出来ないほど黒く、深く、静まりかえった夜。

闇夜に浮かぶ小さな四角い空間を照らし出す物は、TVから垂れ流されるモノクロームのB級映画だけ。

誰かの息づく音さえ聞こえないその空間に、TVから漏れたノイズ混じりの音声が呟いていた。

いつしか、自分としての思考を止め、全てはTVから流れるモノクロームの映像だけが全てに成っていた。

そこは何処なのだろう？

白い月と、赤い月。

二つの月が夜空に輝く世界。

人里から離れた山の麓に広がる闇色の森。

カチカチと頬を照らすカンテラを手した男が、長い両刃の剣を闇へと突き出しながら、一步一步、恐る恐る森へと踏み出していく。

暗い画面に映し出されるは安っぽく輝く剣と、わざとらしく両目をきょろきょろさせた黒っぽく見える男の顔だけ。

キーキーとエンドレスに繰り返す鳥の鳴き声。

ドクンドクンと鳴り響く男の心臓の音。

ビーボービーボーと単調に鳴り響くBGM。

せわしなく画面が揺れ、カンテラの光によって照らし出される森の木々は、ビニールっぽくて嘘っぽかった。

だが、何故か生まれるはるか昔の映画は、今の映画にない臨場感があって、その恐怖に自分の心臓まで早鐘を打つ。

そんな緊張の場面がこれでもかと言うぐらい続く。

まだか、まだ何も起きないのかと、待ちわびたが、結局何も起きずTVの中の男がホッと胸をなで下す。

自分も安心しきっていたのか、切り株に腰を下ろした男の姿をぼんやり眺めていると、まるで心霊写真のように森の奥の闇に、この世の物と思えないような形相をした怪物の顔がぼんやりと浮かんでいた。

突然のことにドクンと自分の心臓が跳ね上がる。

どさっ、と男が腰を抜かして後ずさりして、慌ててカンテラを闇へと突き出す。

カンテラと、木々の間からうっすらと差し込む月明かりが、その森に潜むモノ達を照らし出す。

よく見ると丸坊主の人間に角を付けて、少しメイクをしただけの笑ってしまうぐらい安っぽい怪物。

だが、得体の知れない気色の悪さががあり、一刻も早く男の手にした剣で怪物を殺して欲しかった。

「やはり、この森には怪物がいたか・・・！」

画面の下に汚い字で書かれた字幕が流れる。

男が剣を握りしめ、怪物の方へと剣先を向けると、怪物は背中を向けて走り去る。

あんな怪物を生かしてはおけない。

男はカンテラと剣を手に、びょうびょうと迫り来る林の中、怪物を追いかける。

そして、怪物を見失った時、森の奥にポツンとした灯りをともす小屋が現れる。

男は小屋のすぐ近くにある切り株にカンテラを置くと、剣を片手で強く握りしめ、思いっきり小屋の戸を開け放つ。

過剰なまでの明るい光が男の視界を奪う。

やがて、その明るさに目が慣れると、そこには優しげな笑みを浮かべる華奢な若い男が立っていた。

「こんな所に人が住んでいるのか・・・？」

男が手にした剣を腰のさやに収めると、若者は小屋の中へと誘った。

小屋の中は暖炉があり、小さなカンテラの光がテーブルとベッドを照らしていた。

男は若者に誘われるまま、テーブルの椅子へと腰を掛けると、若者が差し出したコーヒーのカップを両手に包んだ。

若者はベッドに座ると男に向かって話しかける。

「こんな夜更けにこんな所に来るなんて、どうしたんですか、お侍様」

字幕にお侍様と出ていたが、どちらかと言えばこの男は騎士と言った方が良いような趣である。

きっと和訳した人間が日本人に解りやすいように訳したのだろうが、余計にややこしくなっている気がする。

「近頃、里に怪物が現れ悪さをするようになり、どうやらその怪物がこの森に潜んでいるようなので、この私が退治しに来た」

何故か男の腰に差した剣の束の部分がキラッと光る。

「ですが、お侍様。

この森には怪物など居ません」

若者が話している間中、眉間にしわを寄せた男の顔のアップが映り続ける。

表情を変えず淡々していた。

「だが、現に私はこの森で怪物を見たのだ！」

画面が若者へと移る。

「この森に居るのは、自らの罪を懺悔するこの方達だけです」

若者が小屋の戸を開け放つと、闇夜の中に先ほどの怪物が、10体ほど顔を並べていた。

「やはり怪物はいるではないか?!」

男が声を荒くして言うと、若者は苦笑する。

「この方々が怪物というならば、この私も怪物です」

若者の顔のアップになるが、その顔は女性的であるものの、正真正銘普通の人間の顔だった。

「何を言う、そなたは人間ではないか!!」

男が吼えると、月夜の森に潜む怪物達をその剣でなぎ払っていく。

「止めてくださいお侍様!!」

若者の制止も聞かず、男の全身が怪物達の流した赤い血で染まっていく。

その色はまるで、空に浮かぶ赤い月のようだった。

そして、全てをなぎ払うと、夜の森はしんと静まりかえった。

「人間は誰でも、怪物になれるのです。

私と彼らの違いは罪を犯したか、犯していないか、ただそれだけです。

罪を顔してしまう恐怖に耐えられない私は、人里を離れて罪を犯してしまった方々の懺悔を聞き入れて生きていたのです。

誰よりも罪を犯してしまった方々の気持ちが分かるから・・・」

「何を言っている!? 怪物は怪物だ!! 蔑み殺して何が悪い?!」

男は悲鳴に似た声を上げる。

場面は再び若者のアップになる。

「お侍様・・・。

あなたのような人がいるから、怪物は生まれるのです・・・!」

若者が男に向かってナイフを突き出すと、その刀身には化け物へと変わり果てた男の姿が写し出されていた。

「この私が怪物だと?!」

そして、画面が赤く染まる。

怪物と化した男の腹にナイフが食い込んでいた。

「そして、罪の衝動に負けた私も怪物です・・・」

どさっと男が倒れ込むと、窓越しに映し出された若者の顔が怪物に成っていた。
そして、もくもくと暖炉の煙立つ闇色の森の上には、白い月と、赤い月が輝いていた。

その夜空を背景におどろおどろしい音楽が流れ、スタッフロールへと続く。

放心状態のまま、気が付くとTVの画面は砂嵐を映し出していた。

リモコンの電源ボタンを押すと、パシッと言う音共に画面が真っ黒く染まる。

風で雲が流され、部屋の小さな窓から月明かりがさす。

月夜の照らす怪物。

それは・・・。

月明かりに照らし出され、真っ黒いTVの画面に映し出された自分の顔は、映画に出てきた怪物の顔そっくりだった。

私は雅（みやび）・・・。

私に解ることと言えば、私が雅であり、影であるということ。

影とは街に巣くう獣に心を食われた者のこと。

人々は戦うことをやめ、獣を宿した街を築く。

獣は人の心と時を食らい影を落とす。

街に生きる影は互いに干渉されず、自分が心を失っていることすら解らないま永遠に生き続ける。

だが、街からはぐれてしまった影は時の流れを知り、耐え難い喪失感に失った何かを求めてさまよい続ける。

それは虚しくて、苦しくて、悶える気持ち。

でも、失ったものが何か分からない。

本当に何も無い。

生きし屍。

それが影。

それが私。

影である私は気が付いたら失った何かを求め、この世界をさまよう毎日を送っていた。

自然と意志の力に流されるまま生きている。

なんの変化も感動もない毎日。

もしかしたら、そのまま終わる生命（いのち）かもしれないが、私はそれでも生き続けている。

死に接するたび私は思う。

何時変わるかもしれない日々だから、それでも生きたいと。

私にはその気持ちがなんなのか分からないが、きっとそれは失った心の断片なんだと思う。

だから、私は今も生きている。

きっと、最後までそうして生き続ける。

私が失ってから、どれだけの年月が経ったのだろうか。

解らない。

今までそんな事を考えたこともなかった。

私にとっては毎日は同じ。

ただ、幾つもの今日という日が過ぎていくだけ。

もしかしたら、初めは一日というものを認識していたのかもしれないが、長い旅の中では一日というものの価値は無く、気が付くとその価値を捨てていた。

今すら不確かで、気が付いた時にだけ今を認識して、少しだけ考える。

今、山にいるとか、海にいるとか。

それだけの時間を送っている。

私は生きるために色々なものを捨ててきた。

私には何もないと思っていながらも、確実に何かが残されていて、何かを求める一方で、色々なものを捨てている。

感じることはおろか、自我さえも何時しか消えつつあった。

自我が消える時、それが私が完全な影になりきる時だ。

私の中の影の部分が強まる一方で、影としての帰巢本能は私を確実に本来あるべき場所へと導いていた。

影は街へと帰る。

それがあべき姿。

気が付くと、私は街を眺めていた。

私は帰ってきたのだ。

夜は始まったばかり。

街はあるべき姿を捨てて、日没と共に始まり、日の出と共に終わる。

夜になると街灯に映し出された影達は、互いに干渉し会うこともなく、自我を無くしながらも、その本能により街をさまよい歩く。

そして、朝になると強い日の光の中に消えてしまう。

影達は実体を持たず、触れれば消えてしまう幻だった。

かつてきっと私も影だった。

だが、今の私には雅という名前がある。

それでも他の影がそうするように、私も街をさまよっている。

それは影としての習性。

私は影に他ならないのかも知れないが、今、私は考えている。

何かを感じようとしている。

私は影であり、雅である。

だから、きっと私はこの不安定な影ではなく、他の何かに変わりつつあるのかもしれない。

さまよいながらも、色々な事を考えた。

街とは何か、影とは何か、私とは何か。

答えは何一つ解らなかった。

でも、きっと答えはここにある。

何故かは解らないが、そういう気がする。

やがて、夜が明ける頃。

私はこの街に入って始めて実体を持った人間を見た。

長い髪と女の子のような容姿を持つ小さな男の子。

服装を除けば女の子に見えてもおかしくはないが、なぜだか私はこの子供が男の子だと思った。

・・・それは私がこの男の子を知っているから？

この感じた既視感・・・。

私は知っている。

「悠・・・」

私は彼の名を呼んでいた。

そう、彼の名は・・・悠。

はるかだ。

依然、他の事は思い出せない。

私が彼の名前を思い出したのが不思議だ。

悠は私に名を呼ばれ、私の方を見て屈託の無い笑顔を見せる。

汚れない純粋な男の子・・・。

「お姉ちゃんは誰？」

「私は雅だ」

無機質な私の声と比べ、悠の声はどこか柔らかい。

それはきっと、悠が心を持っているからだろう。

「僕、みやび知っているよ」

私は悠を知っていて、悠は私を知っている。

それがあたり前で、不思議な事なんて何一つない。

そんな気がした。

その時、街に日が昇る。

朝焼けに照らされると、影となりさまよう人々は光の中に融けていった。

他の影が消える中、私は朝日に消えることなく、実体としてその場にあり続けた。

やはり、私は他の影とは違うらしい。

日の昇った街には誰もいない。

悠は一人でこの街に生きているのだろうか？

寂しくないのだろうか？

寂しい・・・？

私が何故そんな事を思うのかよく解らない。

「寂しくないのか？」

「僕、寂しくなんかないよ。

だって、みやびが一緒だもん」

そう言って微笑む悠。

何故か胸の奥が暖かくなるような気がした。

そんな気持ちがむずがゆく、信じられない。

「私がか？」

「みやびが一緒だから」

悠はただそれだけ言うと、私の手をギュッと握った。

思わず頬がゆるむ。

私は笑っているのか・・・？

「みやびはどこ行くの？」

「宿をとる」

夜を待って、再び街が影に飲まれるのを待つ。

影の中にはきっと何かある。

全ての真実と獣の姿がそこにあると、私の中の何かが知っている。

「僕も一緒にいい？」

「別にかまわない・・・。

何処か泊まる場所を知っているか？」

「僕の家が良いよ。

僕の家、アパートなんだ」

「そうさせてもらう」

行き着いた先は古い、煉瓦造りのアパートだった。

またも既視感を感じる。

ふと、何か衝動に駆られ、アパートの前に植えられた木の幹をさすっていた。

ざらざらとして、すこしひんやりとしている。

だけど、どこか暖かい。

暖かく感じるのは私の心か・・・？

手を放すと、みやびとはるか、私と悠の名前が彫られていた。

これを彫ったのは私か・・・？

そう私だ。

だが、思い出すことはままならない。

「こっちだよ」

悠に言われるまま、鉄で出来た階段を上がっていく。

階段は錆び付いていて、ギシギシと音を立てる。

「ここは私の家・・・」

目の前の扉を前にして私はそう呟いた。

「そうだよ、ここがみやびのお家だよ」

私は無意識のうちにポケットの中に手を入ると、鍵を取り出してドアを開けていた。
いた。

鍵は私のポケットから出てきた物だから、きっと私の物なのだろう。

そして、この部屋も確かに私の部屋らしい。

鉄の扉の向こうには見たことのある風景が広がっていた。

私は何かを確かめるように部屋のなかを調べて歩く。

蓄音機にラジオ。

ソファーにベットに、大きな暖炉、赤い絨毯。

その一つ一つが私の中の何かにかみ合う。

とても居心地の良い空間。

間違いない、ここは私の部屋だ。

私はソファーに腰を掛けると、じっと宙を眺めていたら、悠に脇腹をくすぐられた

。

私はくすぐったく、身をよじらせた。

「こらっ！」

私は思わず、声を出していた。

・・・しばらくして、私が私らしからぬ行動をしていた事に気づく。

そんな自分が可笑しくてたまらなかった。

私の中の何かが駆け出す。

無邪気で汚れない何かが。

「待てえっ！」

私は悠を捕まえようと、必死になっていた。

悠は捕まるものかと逃げ回る。

私は笑っていた。

楽しかった。

何時しか遊び疲れて、二人ともベッドで重なり合うように寝ていた。

気が付くと私は悠の小さな身体を抱きしめていた。

可愛く汚れない寝顔を見ていると、とても優しい気持ちになる。

頭を撫でると髪がさらさらで気持ち良かった。

とろけてしまうような感じだ。

とても幸せだった。

だが、時は待ってくれない。

日が沈み、街は再び影に飲まれる。

私は行かないといけない。

いつまでもこうしてられない。

私は起きあがると悠の寝顔を見て微笑んだ。

「さようなら、悠」

私は悠に毛布を被せると影に落ちていった。

街に渦巻く意志。

背中がぞわぞわしてとても不安になる。

今まで感じたことのない恐怖だった。

すれ違う影たちは仲間のようにいてそうじゃない。

流れる風は冷たく心を吹き抜ける。

心を捨てれば受け入れてくれる街だけど、異物にはその牙をむける。

心ある者を食らう獣の巣くう場所。

それが街。

きっと、望むようなものは街にはない。

風にさらされ寂しさに傷つきぼろぼろになりながらも、街で生きることしかできないから、心を捨てて自分である事を放棄するけど、きっとそれは何か違うから、救いを求めてさまよい続ける。

悲しい人間達。

それが影。

それが私だった。

そう、私は街で生まれ、街で育った人間なんだ。

そして、私は再び闇へと帰っていく。

獣に心を食われ、私が消えていく中、街角に幻影を見た。

それはまだ影になる前の自分の姿。

それは思春期を迎えた頃の自分。

そして、もう一人。

少年へと成長した悠の姿を見る。

私は幼なじみであった悠に恋をしていた。

語らい、二人で共有する時間は、幸せで掛け買いのないものだった。

だが、成長しても純粹さを失わない悠に安らぎを感じると同時に、私はもどかしさを感じずにいられなかった。

血を流し、世の中の矛盾を直視し、大人になって汚れていく私は、悠の純粹さが許せなかった。

大好きな悠に冷たい感情を抱く自分が許せなかった。

そんな私をいつも慰めてくれたのは悠の優しさだった。

その優しさが心に深く突き刺さって、その痛さに私は悠を突き飛ばした。

その”純粹さ”をけなし、汚い言葉で罵った。

そんな自分に耐えられない私は、獣に心を食われて影になった。

こんな罪を背負って生きるのなら、もう一度すべてを忘れて影になりたい。

そう渴望しても、獣は私の心を暗い尽くすことが出来ずに傷を負った心だけがそこに残った。

なんで、私の心は壊れて消えてしまわないんだ？

ふと我に返ると、夜は明けて影は消え去り、忘却の街にただ一人私だけが取り残されていた。

罪悪感に苛まれ痛みに心がズキズキと脈打つ。

「どこか痛いのか？」

呆然と立ちつくす私のズボンの裾を幼い子供の姿をした悠が掴む。

「だいじょうぶだよ。」

「僕がいてあげるよ・・・」

その悠の姿が、幻影の中に見た、汚れ行く私を慰めてくれてくれていた、少年時代の悠と重なる。

私は崩れて悠の小さな肩にすがっていた。

頬を熱いものが伝っていた。

自分の口から漏れる嗚咽で、私は自分が泣いていることに気がついた。

何故、私は泣いているの？

「泣かないで・・・。

一緒にいてあげるから・・・」

そういう悠も嗚咽をこらえて泣き出して、私の首をぎゅっと抱きしめた。

その悠の優しさと純粹さに涙をこぼすこの気持ち。

まるで悠のような優しく純粹な気持ち。

生まれたままの私の心。

悠と同じように自分にも純粹な心があったんだ。

でも、いままでそれを忘れていた。

純粹な気持ちを守りきれほど、私は強くなれなかった。

純粹な子供のままでは街で生きてはいけなかった。

純粹だった子供の時間を奪い、大人という影を落とす獣。

それは街に生き、汚れることを恐れ、時と心を捨てた自分だった。

それが街に巣くう獣の正体だった。

やがて泣き疲れて眠ってしまった幼い悠を迎えに来た、小さな女の子。

それは幼い時の自分の姿だった。

二人は手を取り合い忘却の街へと消えていく。

私はそれを見守る。

時の止まった忘却の街で生き続ける、無くしたはずの自分の半身、自分にとっての影。

この胸にある暖かい気持ちを私は忘れない。

私は私として生きるために夜の明けた街を去る。

私はもう影ではなくなった。

遠くて広い青空に もくもくと立ち上がった入道雲。
突き刺すように輝く太陽。
見渡す限り何処までも続く大海原。
風を受けて立つ波がキラキラと輝く海洋に、一つの島がぽかりと浮かんでいる。
それは不自然なほど豊かな自然に彩られた美しい島だった。
透き通った水面に、美しい珊瑚礁に囲まれた、人魚の戯れるラグーン。
沖合の波に揺られている海賊船。
冷たい川が流れる洞窟。
刻一刻と崩れつつある小屋。
少し寂しげな墓地。
猛獣や妖精、インディアン達が住まう、鬱蒼と生い茂った深い森。
言い出したら終わりが無い程、この島は多くのものを包容している。
海辺の道を歩けば、楽に一周できてしまうようなその島の内側に、一体どれだけの世界が広がっているか、全てを知る者は誰もいない。
外の世界から来た者は、魔法の岸辺と呼ばれる場所に小舟を着けて冒険する。
ありとあらゆる夢と冒険で満ちたこの島で過ごす時間は、瞬く間に過ぎ去っていくが、決して終わることはない。
永遠に変わり続け、永遠に終わらない。
その島の名を永遠の島、「ネバーランド」と言う。

ネバーランド

ネバーランドに広がる広大な森を抜ける道は、複雑に入り組んでいるばかりか、何処までも同じような風景が続き、道行く者を拒むかのように迷わせる天然の迷宮であった。

不思議なことに、同じ方向に歩き続けても、気が付かない内に一周してしまったり、また、来る度に地形が変わるとも言われる。

さらには灰色熊などの猛獣や、頭の革を剥ぐインディアンの巣窟となっているので、数々の危険を冒してまでわざわざ森に立ち入る者はいないだろう。

10人の少年と、1人の少女を除いては。

戦闘の開始を知らせるインディアンの角笛が、ネバーランド中に響き渡る。

森の中を各々の得物を持って駆け回る2つの集団。

1つは血に染まった斧を持ち、腰に殺した相手の頭皮をぶら下げた、全身に入れ墨だらけのインディアンのパーティ。

そして、もう1つは小さなナイフを持った少年達のパーティ。

自分の身長の数倍ほどある巨大な斧を肩に背負ったインディアンの美しい女性タイガーリリーと、獣のように四つん這いで大地を駆ける英雄グレート・ビックリトル・パンサーの引き連れるインディアン達は、人間離れしたスピードで少年達に迫り来る。

いくら、少年達が素早いと言ってもその小柄な体では、巨大な体で獣のスピードを持つインディアンから逃げ切れるはずもなく、あっと言う間に追いつかれてしまう。

少年達の一番最後を走るニブスに、インディアンの鋭い斧が迫りつつある時、少年達は無邪気な笑みで唇を歪ませた。

ニブスの少し前を走っていた双子の少年が左右二手に分かれると、手にしていたロープを足下に張る。

ニブスはそれを障害物競走のハードルのように飛び越えると、彼の背中を追っていたインディアン達はロープに足下をすくわれ、たちまち三人連続して転んでしまう。

そこを待ってましたと言わんばかりに、木の上から植物の葉を縫い合わせて作った服を着た少年が飛び降り、手にしたナイフで転がっているインディアン達の心臓をひと突きする。

「1人、2人、3人・・・！」

切り裂きジャックもビックリな殺しだね！！」

木の上でその少年の活躍を見ていた少年スライトリーは、声に出して死人の数を数えると喜ぶ。

インディアンを殺した少年、ピーターの緑色の服はインディアンの返り血を浴びて真っ赤に染まる。

頬に付いた返り血をペロッと舐めると、ピーターは無邪気な笑みに唇を歪める。

「こんなに早く殺しちゃうなんて、俺って本当に凄いなあ！」

満面の笑みを浮かべるピーターの周りを、まるで惑星の周りを回る衛星のように、小さな光が回っていた。

それはよく見ると羽の生えた小さな人間、妖精であった。

妖精を持つ者、それはこの島に置いて創造主に代わって、不正を働く者を狩る権限を与えられた最高の冒険者の証であった。

後続のインディアンからみれば、力を顕示する生意気なピーターの笑顔は、悪魔の微笑みにしか見えなかった。

ますます怒りに血を沸騰させるインディアン達は、一斉にピーターの無邪気な笑みに向かって斧を振り下ろす。

だが、ピーターは軽くジャンプして、真上にあった木の枝を掴むと、そのまま鉄棒のようにし回転し、その反動で木に登っていく。

インディアン達を得物を狩るライオンだとすれば、少年達は木の上を自由に動き回る猿のようだった。

そして、目でピーターを追いかけるインディアン達に、石つぶてが襲う。

木の上に登って両腕一杯に抱えた小石を投げるのは、カーリーとトゥールズの二人の少年。

二人のコントロールは最高で、上を向いていたインディアン達の両目を潰す。

苦痛の声を上げているインディアン達に向かって、ピーターが再び襲いかかり彼らの喉元を手にした短剣で切り裂いていく。

血飛沫を上げて次々に倒れていくインディアン。

「4、5、6、7人！！」

「すげえ——っ！！」

「かっちょい——っ！！」

喜ぶストライトニーの後ろで、大きな歓声を上げるのはジョンとマイケルの新米二人。

ヒューヒューと指笛を鳴らす二人に、ピーターは調子に乗ってポーズを決める。

「やっぱり、俺って格好いいでしょ！！」

「ピーター危ない！！」

森の中に響く少女の声にはっとなったピーターは、瞬時に体を翻し迫りつつあった斧を交わした。

ドスン！！

大きな音を立てて地面に食い込む斧。

その隙をピーターが見逃すはずもなく、次の瞬間にはインディアンの脊髄に短剣が突き刺さっていた。

「8人目！」

「ピーター！！」

あんまり殺し過ぎちゃうと、インディアンさんも可愛そうだわ！！」

木の上でみんなを見守っていたのは、ジョンとマイケルの姉であり、この中で唯一の女の子であるウェンディだった。

「ちえっ！ 解ってるよ！！」

そんな、ピーター達のやりとりが行われている間、残った3人の下っ端インディアン達は一斉に一人の少年を襲っていた。

黒い革の服を着たその少年の名はネロ。

小粒揃いの少年達の中でも、一番体が小さく体格に恵まれない彼は、新米のウェンディ、ジョン、マイケルですらすぐに覚えられた木登りを、今だに覚えられずにいた。

現在のネバーランドでは最高の冒険者であるピーターのパーティの中じゃ最弱で、足も遅く木にも登れないネロは、いつも敵に狙われていた。

「ピーター！！」

それに気が付いたウェンディが叫ぶよりも先に、ピーターは待ってましたと言わんばかりに地面を蹴って加速し、手にしたナイフで次々とネロを襲っていたインディアン達を輪切りにした。

どさっ！！

インディアン達のは上半身と、下半身を両断されて地面に倒れた。

「9、10、11人！！」

結局みんな殺しちゃったね！！」

「仕方ないだろ？」

そうウェンディに向かって言うピーターの顔はとても満足げだった。

白い歯を輝かすピーターのあどけない笑顔にウェンディの心はときめき、ついついピーターの行きすぎた行為を許してしまう。

さすがに部下達を全員殺されたタイガーリリーと、グレート・ビックリトル・パンサーは、悔しさを残しながらも敗北を知らせる角笛を吹き鳴らしながら敗退して行った。

その様子を見ていた少年達は、一斉に拍手喝采、指笛を吹き鳴らす。

「さすが、僕らのリーダー！！ ネバーランドのヒーロー！！ ピーター最高っ！！」

「いやあ、どうもどうも！！」

手を振って自らをアピールするピーターにみんなが微笑む中、ネロは彼に他とは違う眼差しを向けていた。

ネバーランドの夜は不定期に訪れる。

ネバーランドに夜が訪れている間、全ての空間は閉鎖されその場で身動きがとれなくなる。

万一外で夜を迎えたならば、永遠に続くように感じる闇の中に取り残され、朝を迎えると同時に活動を再開した獣たちに襲われる事になるので、大抵の人はねぐらに帰って仲間と共に一晩を過ごすか、魔法の岸に止めた小船で外の世界に帰る。

海賊の帆船も含め、全ての船がネバーランドの海から消えて、すっかり静かになった頃。

真っ赤に染まった岬に膝を抱えて佇む小柄な影が一つ。

黒い革の服に身を纏ったネロだった。

ネロは眼下に広がる人魚のラグーンの更に向こう、水平線の向こうに沈みつつある夕日を、遠い目で見つめていた。

そこに、一人ねぐらに戻らないネロを探しに来たウェンディが立ち寄る。

「なんだ、ここにいたのね」

優しいウェンディの声にネロは振り返らずに言う。

「うん、この夕日が見たくてね」

ウェンディはネロの横に立って、目を細めて夕焼けを見る。

とても広く遠く感じる空も、もくもくと浮かんでいる雲も、キラキラと輝く海も真っ赤に染まり、とても幻想的な風景だった。

「本当に綺麗ね・・・。

ピーター達は夕日が嫌いだから、こんなにゆっくり夕日を見たことはなかったわ」

「冒険者はみんなそうさ。

ネバーランドの夜は絶望だとするなら、ネバーランドの朝は希望ってよく言うよね。

朝が来ればネバーランドに新しい冒険が増えて、もっと楽しい時間が始まると思うけど、それでも外の世界やねぐらで過ごす退屈な夜は耐えられないものだから・・・

」

「男の子って、その時のことしか頭にないのよね」

ウェンディの核心を突く言葉にネロは思わず苦笑する。

「刹那的に生きているからこそ、永遠を求めるのかもしれない」

「それがネバーランドなのよね」

ネロは頷くと余計に遠い目で夕日を眺める。

「でも、僕はこのネバーランドの夕日が好きなんだ。

永遠と変わり続け、永遠と終わらない、ネバーランドに訪れる一瞬だけの終わり。

何処まで行っても決して終わらず、こんなにも”弱い”僕という存在すらも、永遠であり続けるこの島で、この時だけは楽になれる気がするんだ・・・」

ウェンディにはネロが真っ赤に染まった水平線の向こうに何を見ているかは解らなかったが、その気持ちは何となく解る気がした。

ウェンディの心に、永遠に対する不安が生まれつつあったからだ。

「・・・じゃあ、私は先に帰るから、夜になる前に帰ってきてね」

そう言って立ち去るウェンディ。

だが、その晩、ネロはねぐらに帰ることはなかった。

明るる日、夜明けと同時にピーター率いるパーティは早速に活動を開始していた。

さすがにこんな時間から冒険しているパーティは珍しく、いつもは大勢の冒険者が集まって騒々しい場所でも静かなもで、不思議と足取りも軽かった。

多くの者は外の世界の世界での生活を持っていて、学校や仕事の終わった後や、寝る前の時間にネバーランドで冒険しているので、こんな早朝では仕方が無いことだろう。

それに全員がネバーランドで生活しているパーティなど、ピーター達のパーティの他に無いだろう。

それ故にピーター達のパーティは、外の世界からはぐれた迷子の少年達・・・「The Stray Boys」と言われていた。

ウェンディはネロが帰ってこない事を気にしていたが、ピーターを始めとする少年達は、誰も細かいことを気にしない性格なので、ネロが居ようとも居まいとも、いつも通りに冒険していた。

海沿いの道を冒険中、ふと誰かが呟いた。

「ネロが居ないと楽だなあ」

その声を聞いたピーターは、大声を上げた。

「そんなこと言っちゃ駄目だろ！！」

ネロだって、俺達の仲間なんだから！！」

ネロが居ないところで陰口を言うなんて、イジメのようだと感じていたウェンディは、ピーターの言葉が嬉しかった。

「さすがリーダー！！」

「言うこと違うね！！」

ジョンとマイケルはピーターを憧れの眼差しで見つめる。

それを横目を見て、いい気になるピーター。

「それに、ネロだって、役立つこともあるだろ！」

つつい調子に乗って言った言葉が、墓穴を掘ることになった。

「おい、ネロが一度だって役に立った事があるか？」

ニブスが言うと、すぐにトゥールズが答える。

「僕は覚えてないな。

君はどう思う、カーリー？」

「さあ。

どうだい、スライトリー？」

「全く無いと思う。

どうかな、双子？」

「僕らも、無いと思う」

「そういえば、ピーターの見せ場を作るのに役立っているじゃん！！」

「言えてる！！」

スライトリーが言うと、みんなは手のひらを拳で叩いて納得する。

「うるさいなあ！」

と声を荒立たせるピーター。

どうやら、痛いところを突かれたらしい。

ウェンディは、ピーターがネロの陰口を止めたのも、格好良いところを見せたかったからだと知ってため息を付いた。

それより、少年達はピーターを怒らしてしまった事に悩んでいた。

過去、何度もピーターを怒らせてしまったことがあったが、そんな時は長い間沈黙が続き、楽しいはずの冒険もつまらないものになるし、突然飽きたとか言って冒険を中止することも良くある。

もっとも、細かい事を気にしないピーターは、しばらく経てば怒っていたことすら忘れ、また冒険へと飛び出すのだが。

ウェンディもピーターの浅はかさはよく知っているのですが、少年達の悩みも良くわかったが、同時にそんな浅はかな所が、自分たちの心を掴んで離さない最大の魅力だと解っていたので、何も口出すことはしなかった。

ああ、これからどうなるんだろう・・・。

少年達がアレコレ悩んでいる所に、目の前に黒い一団が現れた。

まるで貴族のような上品な服装に身を包んだ、右手にかぎ爪の義手を着けた男・・・、フックの率いる海賊団だった。

執拗に少年達を追い回すフック達だったが、このときばかりは救いの手のように感じられた。

「ここで会ったが100年目！！」

今日こそ引導を渡してやるぞ！！」

フックの言葉を聞いて、今までいじけていたはずのピーターの瞳がキラキラと輝く。

「掟は覚えているだろうな？！」

ピーターが聞くと、少年達は一斉に答えた。

「フックはピーターに任せる！！」

ピーターが作った掟が示すとおり、ピーターが最も格好いいところを見せられる時は、ライバルであるフックと戦っている時なのだ。

ピーターが短剣を手にしてフックに向かっていくと、その後に少年達も続く。

少年達は二人一組でタッグを組んで相手を定めると、一人が敵の動きを封じて、もう一人が攻撃するという戦法で、力の少なさを素早さとひらめきでカバーして確実に相手を仕留める。

フックは本当に引導を渡したいと思っていたらしく、引き連れている手下の数は相当多かったが、少年達の前にあつと言う間に数が減っていく。

仲間達の倒れる姿を見て、まだ残っている海賊達は恐怖する。

無邪気に戯れるように、いとも簡単に海賊達を倒していく姿は、小悪魔そのものだったから。

永遠に存在することの出来るこの島では、例え殺されたとしても、代償を支払えば復活出来るが、為す術無く倒されて行くのは苦痛だった。

だが、誰よりも苦痛を感じていたのは、ピーター達の仲間であるウェンディだった。

幼い頃から憧れていた冒険の日々に、夢の世界。

そんな生活が目の前に現れて、あれだけ嬉しく楽しかったはずなのに、今は素直に楽しむことが出来ない。

今自分がここにいることに不安を感じてしまう。

何より、ジョンとマイケル二人の弟が、ピーターを敬愛し、ネバーランドの深みにはまり、他の少年達と共に本気かもごっこ遊びかも解らない冒険や戦いに身を投じている事を苦痛に感じていた。

自分自身ネバーランドに身を置き、ピーターに心惹かれているので、二人を止める事も出来ない。

ウェンディに出来ることはただ見守ることだけだった。

激しい戦闘の中、海賊達はあることに気が付いた。

それは海賊達の動きを翻弄する少年達の中で、動きが拙い二人の少年の存在だった

。 彼の少年達は海賊の周りを駆け回ったり、身を低くして足下を狙ったりと、敵を惑わした後、そのまま安全な場所まで逃げられるような、攻防一体の体制を取っているのに対して、まだ経験の少ないジョンとマイケルはその辺りがうまく出来ずにいた。

海賊達はあえてジョンとマイケルを狙う素振りを見せずに、人知れず反撃の機会を狙っていた。

だが、一人だけ海賊達の動きに気付いた者が居た。

それは一歩離れたところで、少年達を見守っていたウエンディであった。

「ジョン！！ マイケル危ない！！」

戦場の乾いた空気に響くウエンディの叫び声。

その時すでに遅く、海賊達の魔の手はジョンとマイケルに迫りつつあった。

ジョンとマイケルに一齐に襲いかかる海賊達を遮る者は居ない。

それぞれの戦いに気を取られている少年達も、フックと対峙しているピーターも。

「うわあ——っ！！」

ジョンとマイケルの悲鳴が響く。

ウエンディは最悪の事態に目をつむってしまった。

「う、うぐえ——っ……！！」

だが、断末魔の悲鳴をあげたのは海賊達の方だった。

「えっ……？」

恐る恐る瞼を開けると、そこには信じられない光景が広がっていた。

ジョンとマイケルの足下に転がる死体の山。

そして、その頂に君臨していたのは、血で赤く染まった革の服を着たネロだった。

あまりに唐突の事だったので、その瞬間に何が起きたのか、理解している者は居なかったが、次の瞬間、その場にいる全員がその時何が起きたかを知ることになる。

ブンッ！！

虫が耳元を飛び抜けるような音と共に、ネロの掌上に展開される光の剣。

そして、次の瞬間、ネロは大地を蹴ると加速をし、光の残像を残しながら次々と残った海賊達を両断していく。

「あれは、ピーターの技だ……」

次々に死体へと変わっていく海賊達を見て、スライトリーは呟いた。

ピーターは不機嫌な顔をする。

自分と同じような事が出来る者の存在を許すことが出来なかった。

「引き上げだあ！！」

部下達を惨殺されて、さすがのフックも物怖じし、わずかに残った海賊の幹部達を引き連れて退却する。

その様子を冷やかに見つめるネロ。

「ありがとう、助かったよ！！」

と言いながら近寄るジョンとマイケル。

だが、そんな二人に向けてネロは光の剣を突きつけた。

いきなり剣を向けられ、言葉もなく汗を吹き出す二人。

「何するんだよお！！」

そんな様子を見て、少年達の中で一番勇敢なトゥールズが、短剣を握りしめネロに立ち向かう。

「やめるんだ！！！」

ピーターに止められ、ピタッと制止するトゥールズ。

「何で止めるの！？」

トゥールズはピーターが止めた訳をすぐに知る事になる。

彼らの足下に転がったネロが両断した海賊達の死体が、光の数字へと分解されて消えていく。

通常、ネバーランドでは死体は消えず、戦闘終了後に経験や所持金の一部と引き替えに復活出来ることになっている。

もし、あの光の剣で切られていたら自分もあぁなっていたと思うとゾツとし、トゥールズはその場で腰を抜かした。

その勇敢さの裏には、ネバーランドの永遠に依存していた所があり、永遠が崩れた今トゥールズの勇敢さは崩れ去った。

そして、ピーターは少年達をかばうように前に出るとネロと対峙すると、ピーターの周りを衛星のように周回する妖精、ティンカーベルを掌上に乗せる。

ブンッ！！

次の瞬間、ピーターの手にもネロと同じような光の剣が生まれていた。

妖精、それは最高の冒険者に与えられる称号であり、不正を働く者を裁く剣でもあった。

「ティンカーベルが光の剣に？！

それじゃあ、ネロの持っているあの剣も妖精なの？！」

カーリーが言うと、ピーターは言葉無く頷いて見せた。

互いに光の剣を手に構えるピーターとネロ。

そして、次の瞬間激突が始まった。

それは、あまりにも激しい戦いだった。

互いに目にも留まらない速さで、この浜辺の空間を移動しながら、残像を残す剣撃を打ち付ける。

「すげえ！！ ピーターと互角だっ！！」

マイケルが言うとみんなは息をのんだ。

「なんで、アイツあんなに強いんだよ！？」

ニブスの問いかけにスライトリーが答える。

「きっと、不正改造（チート）だよ！！」

「でも、何のために！！」

トゥールズが聞くとスライトリーは愚問だよ、と言わんばかりにため息混じりに言う。

「決まっているだろ！？

アイツは自分が”弱い”から、強いピーターを嫉んでいたんだ！！

だから、仕返ししたいんだよ！！」

「僕らもそう思う！」

双子が言う。

「・・・」

ウェンディは口をつむいだ。

ネロが自分の”弱さ”に胸を痛めていたのは確かだが、あの遠くを見る瞳は、みんなが言うモノとは違うモノを見ているように思えてならなかった。

理由など関係ない！！

ピーターは心の中でそう叫んでいた。

不正改造だろうが、何だろうが、今こうして妖精の剣を振りかざし、不正行為を犯してこの島の秩序を破っているのは事実だった。

「永遠を脅かす者に裁きを！！」

ピーターは相手の懐に入り込み、必殺の間合いで剣を横に一閃する。

走る光の残像。

だが、その残像は弧を描く途中でとぎれていた。

ネロの手にした光の剣に止められていたからだ。

ピーターはティンカーベルの出力を上げ、光の剣ごとネロを叩き切ろうとする。

きゅいん————ん！！

光が集束しピーターの持つ光の剣は膨張していく。

あまりの熱量でピーターの手や腕が焼けていく。

だが、それだけの出力を持ってしても、細身のネ口の剣に一向に歯が立たない。

そればかりか、その出力はティンカーベル自体に強い負担をかけていた。

ぴきっ！！

始めは一本の細い筋だった。

まるでダムが決壊したかのように、次々とヒビが入り、ピーターのティンカーベルは光の粒子となって砕け散った。

「その強度・・・。

まさか、始まりの妖精、クイーンマナ・・・」

その瞬間、ピーターはティンカーベルに全ての力を奪われ力尽き、ネ口の足下に倒れ去った。

いくら、死んでも消されても無いと言っても、もはや戦闘不能だった。

ピーターが倒れた時点でネ口に太刀打ちできる者は居ない。

少年達は体を寄せ合いその時を待つしか出来なかった。

一步、一步。

ネ口が少年達に近づくたびに、迫りつつ恐怖に身をふるわせる。

血で濡れた長い髪。

何処か遠くを見ているような虚ろな瞳。

血に染まって真っ赤になった革の服。

輝きを放つ光の剣。

ゆっくり、確実に近寄って来るその姿は、まるで悪魔のようだった。

「嫌だよ！！ 消えたくないよ！！」

ジョンが泣きながら叫ぶ。

だが、ウェンディはただ一人、冷静にその状況を見つめていた。

自分達は今までこれと同じ恐怖を、インディアンや、海賊達など、他の人間に与えて来たので、当然の報いのように思っていた。

どうせ、このままネバーランドにいても楽しく思うことが出来ない。

これと言ったやる気もなく、ただそこにいるだけ。

それは、ただの苦痛でしかない。

ならばいっそ、この世界から消えてしまいたい。

さようなら、ネバーランド。

ウェンディが心の中でそう呟くと、自然に涙がこぼれている事に気が付いた。

止めどなく脳裏に浮かぶネバーランドでの思い出。

大人や時間に束縛されて生きていたウェンディにとって、自由の象徴のようなピーターに連れられやって来たネバーランドで過ごす時間は、とても楽しかった。

でも、何時しかそれを楽しいと感じることが出来なくなっていた。

それは楽しいことばかり続いても、それと気付かずに通り過ぎてしまうから。

そんな、ものが永遠であって良いはずがない。

その時、初めてウェンディは自分が抱いていた気持ちの正体を知った。

そして、ネロの気持ちも。

だが、人にそれを求めるほど、ウェンディは”弱く”はなかった。

ウェンディは迫りつつある黒い影に向かって叫ぶ。

「みんな！！

ピーターを信じるのよ！！

みんなの思いの力をピーターに届けるの！！」

「ピーター！！」

ネバーランドにピーターの名を叫ぶ少年達の声が響く。

すると、少年達の体から光の球が生まれ、それがピーターの体へと降り注ぐ。

うっすらと光を発するピーターの体。

そして、ピーターは光を放ちながら、力強く地面を踏み込み立ち上がった。

ピーターの体から発せられる光は、空中で収縮して光の球になる。

それは失われたはずのピーターの妖精、ティンカーベルだった。

振り向くネロ。

そして、互いに光の剣を手に、再び対峙する。

「俺は絶対に負けない！！

仲間が存在が俺を支えてくれるからだっ！！」

そして、衝突する。

ネロは再び手にした剣で攻撃を防ごうとしたが、ピーターの剣はネロの剣をうち砕き、そのままネロを真っ二つに切り裂いた。

「これで、ようやく永遠から解放される・・・」

そして、ネロの死体が夥しいほど大量な光の数字になって分解されていく。

ありがとう・・・。

ウェンディにはネロの心の声が聞こえたような気がした。

「さようなら、ネロ・・・」

そう、全てのモノにはそれが必要なのかも知れない。

それがなければ今すら不確かで、同じ時を繰り返すばかりで何も始まらない。

それを教えてくれたネロ。

自らそれを求めていたネロ。

でも、彼は自らの意志で、かりそめの永遠が続く楽園から離れられるほど、”強く”なれなかった。

きっと、誰よりネバーランドに魅せられていたから。

「やった————っ！！！」

「さすがピーター！！！！」

「こんなに格好いいと思ったこと無いよお！！！」

「勝てたのはみんなのおかげさ！！！」

拍手喝采でピーターを迎える少年達に、カッコつけたセリフを返すピーター。

「でも、なんか今凄く、ここにいられて良かったって思えるよ！！」

「僕らもこんなの初めてだよ！！」

そんな、少年達の様子を見てウェンディは微笑んだ。

「私は自分の意志で、その時を迎えるよ。」

その為に、私は”強く”なるから……」

と呟きながら。

ネバーランドはこの事件の修正のため、早めの夕焼けに包まれる。

ウェンディは一人、その夕日を見つめた。

そして、しばらくの後、その時が来る。

「ありがとう！！」

さようなら、ネバーランド！！」

ネバーランドにウェンディの声が響いた。

それは一つの終わり。

そして一つの始まり。

そうして紡がれるモノこそ本当の……。

R y u t o S i d e S t o r y

「衝突」

ばぁん！

誰もいない校舎に大きな音が響き渡る。

拳がズキズキと痛むので、見てみると血がにじみ腫れあがっていた。

息が切れるほど痛かった。

「自分の能力の無さを八つ当たりするのはいけねえなあ」

再び校舎に訪れた沈黙を静かな低い声が破る。

反射的に俺は声のする方を振り返りその主をにらみつけていた。

廊下の向こう、逆光の中にたたずむスーツ姿の男、国語教師の風間祐一を！

脳裏にさっき味わった屈辱がよみがえると、俺の中の怒りが目覚めては息を荒立てる。

もうとっくに拳の痛みなど忘れていた。

「負けず嫌いは結構だが、物に八つ当たりするのは最低だ！」

そういうと風間は拳を握り込み、俺に向けて迫ってくる。

気がつくやうに頬に強い力を受けて、俺は壁にたたきつけられ床に倒れ込んだ。

頬と口の中が熱く感じてたまらないほど痛かった。

口の中が切れて、血がたれているのが解った。

手の甲でぬぐうと生暖かくてヌルツとした感触があった。

怖い・・・。

俺の本能は警戒信号を放ち、のどが熱くなり、目頭に涙がにじんで、身体がガタガタと震えた。

どこかで冷静に自分を見つめる自分がいて、こんな俺の姿に自己嫌悪していた。

「・・・情けない」

そう小声でつぶやいていた。

ことっ。

うつむき下を向いた視界に風間の革靴が現れた。

俺は上を見上げると、風間は逆光でシルエットとなって見えた。

・・・。

俺はどうなるんだ？

様々な不安が頭をかすめては消えていく。

どうにでもなるが良い。

もう一人の俺が言った。

そして、風間が沈黙を破る。

「二週間の停学・・・、と言いたいところだが、今は春休みってことで処罰はナシだ

。

さっきも言ったように、二年になったらオレのCクラスで勉強することだな。

何せお前は三学期の国語のテストで零点を取ったんだからな。

はっはっはっー！」

風間は笑いながら言った。

腹が立つっ・・・！！

こんなに腹が立ったのは初めてだった。

そして、自分は何も出来ないちっぽけな存在だと言うことを、嫌と言うほど思い知った。

俺は負けたんだ・・・。

「悔しかったら、いつでもかかってこいよ！」

ヒトとの衝突を避けていたらお前は一生負け犬のままだからな。

それとお前が傷つけた学校に謝っておけよ。

じゃ、がんばれよ！！」

コツコツと音がすると風間は廊下の向こうへと消えていった。

ゆっくり起きあがって廊下の壁を見てみると、そこにはこぶし大の穴が空いていた

。

俺が開けた穴だ・・・。

古くなってきた校舎でも、昨日まであんなにきれいだったのに、俺が傷つけた

んだ・・・。

拳や頬の痛みなんかより、なんでこんなことしたのか、後悔の気持ちで俺の心は埋め尽くされていた。

かみしめてもか、みしめても自然に涙がこぼれた。

俺は壁に空いた穴をなでながら心の中で、ごめんと何度もつぶやいた。

そして俺は大人の大きさに気づき、自分が小さな子供であることに気がついた。

風間を見返すような大人になりたかった・・・。

Y u t u r u S i d e S t o r y

「予感」

わたし、夢を見ていたの・・・。

気がつくとベッドの上から天井をじっと眺めていた。

どんな夢かは思い出せないけど、胸が高鳴る切ない気持ちだけが残っている。

なんだか、優しい気持ちにさせてくれるような、そんな夢だったと思う。

夢の余韻に浸っていると、半分開かれた部屋の窓から春風が吹き抜けた。

とても気持ちのいい春のおいがした。

暖かい春の陽気はわたしの胸を高鳴らせる。

別れを彷彿させると同時に、新しい出会いを期待させるから。

ベッドから飛び起きてカーテンを開くと、柔らかい日の光が差し込んだ。

「うーんっ！」

思いっきり背伸びすると気持ちがよくてたまらない。

よしっ、出かけるかっ！

こんな日はいてもたってもいられないよね。

わたしはパジャマを脱ぎ捨てると、タンクトップを着て、オーバーオールを履くとヘルメット片手に部屋を飛び出した。

団地の階段をぐるぐると駆け下がり、向かうは階段のところに止めてある私の愛車NSR250R！

小さくて丸みを帯びたボディが赤と白で塗ってあって、なかなかカラフルなバイクなの。

元々、お父さんが乗っていたものだったんだけど、わたしが16歳になると同時に免許取ったら、誕生日プレゼントだってくれたんだ。

今、高校一年と二年の間の春休だから、一年生の夏休みに免許を取ってもう半年になるけど、ただ単に乗ることが楽しくて、いろいろなところに行って来た。

ヘルメットをかぶってバイクにまたがるとキーをひねり、クラッチレバーを握りながらスターターのボタンを押すと、キュルルって音とともにパルパルと小気味良い排気音と振動を立てて、エンジンに命が灯る。

アクセルをあおると、ブーンと特有の甲高い音が鳴る。

ずっとお父さんの後ろに乗かって、風を感じてきたわたしは、このNSRの音が大好き。

初めのうちは言うことを聞いてくれなかったけど、最近じゃわたしが思った通りに動いてくれるんだ。

「発進っ！」

NSRにそう言うと、わたしはギヤをローに入れて、アクセルをあおりながらクラッチをつないだ。

私のイメージの中ではバイクがうなりをあげて走り始めた。

そう、こんな風に、NSRは私の思い通りに動いてくれる！

きゅる！！ ずぼん！！！！

「きゃっ・・・？」

気がついた時には前輪が滑って体が投げ出された後だった。

スピードが乗っていなかったのでズリズリと引きずられることはなく、ただドテッと道路に転げただけだった。

それでも脇腹を強く打って、一瞬息が出来ないぐらいに苦しくて、数秒間肩を抱えて蹲ってしまった。

私の中のバイクを駆る自分のイメージはむなしくも崩れ去り、そこには無惨にも転けて地面に蹲る私の姿だけがあった。

ううっ、現実は厳しい・・・。

私はすぐに立ち上がってバイクの無事を確認しようとした。

バイクの前輪が道路の排水用の溝にハマってしまっていた。

ずっぽりと・・・。

傷、自体は無いみたいだけど、その状況をみればみるほど思わず冷や汗が出て、顔に引きつった笑いが浮かんでしまう。

はたから見ればちょっと不気味かもしれない・・・。

R y u t o S i d e S t o r y

「殻」

学校の帰り、いつも通学に使う団地の間を通る道は、満開の桜並木に包まれて淡い桜色に染まっていた。

暖かく気持ちのいい春の陽気に包まれて、路上では子供たちが戯れ、それを目で追う母親たちが談話していた。

こんなにも心地よい日なのに俺は憂鬱でたまらなかった。

(おまえの親父は平凡に生きることが出来なかったから死んだんだ)

唯一の肉親である祖父が口癖のように何度も言ってる言葉が、暗示のように頭の中に繰り返し響いていた。

一年前、エレベーター式で大学に上がる私立高校に入学した俺は、真新しい制服に身を包みこの桜の道を歩いていた。

平凡こそ幸せだと信じ、何事もない日々を新たな学校生活に望んでいた。

ただ、望まれたこと、当たり前なことを当然のようにするだけで、それは叶うと思っていた。

事実、一年の二学期まではそれで何事もない生活を送ることが出来ていたんだ。

そうすることが最良だと信じていたんだ。

だが、今ここには敗北を知った俺が同じ道を歩んでいる。

俺は道を間違ってしまったのだろうか？

いや、そうじゃないはずだ。

あの三学期の国語のテスト、大学入試を配慮に入れた作文問題だった。

題目は「将来の夢」だ。

俺は学費を出してくれている祖父に恩を返すために大学に行き、いずれは名の通った企業に就職したいと書いた。

その結果が零点で、AクラスからCクラスへのランク格下げだ。

はっきり言って俺よりも曖昧でひどい作文を書いた奴なんて山ほどいるはずだ。

なぜそいつらが格下げじゃなく、俺だけ格下げなんだ？

個人的な作為があったとしか思えない。

それとも、俺に足りないものがあったのか？

いずれにせよ、このままじゃ祖父さんに会わせる顔がない。

なんとかしなくては・・・。

きゅる！！！！！！

ずぼん！！！！！！

「きゃっ・・・？！！！！」

その時、タイヤが滑るような音と、女の声が建物に反響して響き渡った。

事故か何かか？

・・・まあ、俺には関係がないことだ。

頭のどこかで引っかかりを感じながら足を進めると、目の前に道路の溝にハマったバイクを持ち上げようとするオーバーオール姿の女の子の姿があった。

すこし茶色い髪を肩のあたりで切りそろえ、小柄で幼い感じのする可愛らしい少女だ。

一生懸命持ち上げようとはしているが、女の子の力じゃ無理だ。

しかも、なにやら不気味・・・、いや素敵な笑顔まで浮かべている。

俺は今、自分のことだけで精一杯で人と関わっている余裕なんて無いんだ。

すれ違いざまに女の子の顔が見えた。

さっきは引きつった笑顔を浮かべていたのに、今のその顔には悲しみとも思える表情が浮かんでいた。

何故か一瞬胸が痛んだ。

俺には関係ないことなんだ、そう言い聞かし立ち去ろうとするが、その時、風間の言葉が脳裏に響いた。

(ヒトとの衝突を避けていたらお前は一生負け犬のままだからな)

再び怒りがわき上がって来た。

俺に足りないところがあるならば、すぐに補って見返してやるから待ってろよ！！

Y u t u r u S i d e S t o r y

「出会い」

どうしよう・・・?!

初めは笑っていられたけど、だんだん不安でたまらなくなってきた。

どんなにがんばったって、わたしの力じゃ持ち上げることは出来ないし、もしかしたらバイクのタイヤ、パンクさせられていたかもしれない・・・。

脳裏に”あの子”たちの顔が浮かぶ。

(自分が自分であり続ける道を歩めば、世の中からの逆風をうけることもある)

お父さんの言葉が痛いほど解る。

でも、これって辛すぎるよね・・・?

わたしだって誰かに理解されたいし、誰かに助けてもらいたいんだから。

でも、いつもわたしは一人なの・・・。

「大丈夫か・・・?」

その時、目の前に一人の男の子が現れた。

前髪が鼻先まで伸びた真っ黒い髪で、黒い学ランの胸ポケットに学校名が刺繍されている。

わたしと同じ学校の生徒だった。

「うん・・・」

「手伝ってやるよ」

それだけ言うと彼は無言のままハンドルに手をかけた。

「くそっ・・・!!!」

やっぱり男の子の力でも重いのか、彼は声を漏らしながら力を込めていった。

「くっ・・・!!!」

ズズッ・・・。

タイヤの動く音、ゆっくりとだけ前輪は持ち上がっていった。

そして、完全に抜けきるとバイクの重さを支えられなくなったのかよろけそうになっていた。

「あぶない・・・!」

わたしはバイクを支えようとするが、間に合わなくて彼はバイクの下敷きになって

しまった。

「ごおわっ……！」

彼はカエルが潰れたような声を出した。

く、苦しそう……。

わたしは思わず、子供の頃お父さんのバイクをいたずらして、下敷きになったときのことを思い出した。

あのときは息が出来ないぐらいに苦しかったなあ……。

なんて、そんなことを思い出している場合じゃない。

「ごめんね、大丈夫？」

わたしはバイクを引き起こしながら言った。

「まあ、一応……」

そういう言う彼は脇腹を押さえて苦しそうにしていた。

……大丈夫なわけないよね。

また、ハマってしまったらどうしようもないし、バイクを安全な位置まで移動させようとしたら、前輪が脈打って思わずよろけてしまいそうになった。

不安的中、思った通りパンクしていた。

「パンクしているじゃないか、押すの手伝おうか？」

「ありがとう、でも一人でできるよ」

なんとか押そうとするけど思うように動かずによろけてしまった。

「ほら、危ない」

すかさず彼が支えてバイクが倒れずにすんだ。

「俺がやるから下がってて良いよ」

彼はわたしからハンドルを受け取ると、脈打つタイヤを制して溝からバイクを遠ざけて平らな場所でスタンドを立てた。

やっぱり男の子はすごいな。

バイクを押すのにも重たいものを支えるバランス感覚が必要で、わたしなんてバイクを押して回れるようになるのも大変だったし、当然パンクしているとなるともっと難しい。

それをいとも簡単に出来るんだから。

「ありがとう！」

すごく困っていたから、助かったよ」

わたしが言うと、彼は照れくさそうに何も言わずに微笑んだ。

その笑顔におもわず胸が高鳴った。

彼はわたしより一〇センチ高いぐらいの男の子にしては小柄な方だけど、ずいぶんとたくましく見えた。

その姿にお父さんの面影を重ね合わずにはいられなかった。

やっぱり、男の子はカッコ良いな。

もう、とっくにパンクしていたことなんて、どうでもよくなっていた。

「君はバイク乗っているの？」

思わず聞いてしまった。

「いや、乗ってない。

でも、どうして？」

「なんか、バイク押すの上手だったから。

すごく似合ってたよ」

わたしなんかより、全然バイクが似合っているし、このヒトにバイクに乗ってもらいたいと心から思っていた。

「もし、良かったらだけど、バイクに乗ってみたい？」

突然の私の言葉に彼はとまどいを隠せないでいた。

初対面のヒトにいきなりなれなれしくするからわたしはみんなに嫌われるんだ・・・。

この人にも嫌われたかもしれない。

そう思うと不安でたまらなくなった。

「バイクに乗るなんて考えたことはなかったよ。

そんな自分を想像するとちょっと楽しいかもな」

彼は遠くを見る目で満開の桜の花の間から空を仰ぐとそう言った。

その言葉を聞いてわたしはホットして、うれしい気持ちでいっぱいになった。

「でも、現実にはそんな余裕はない。

悪いけど俺はバイクには乗れないな」

なんだか、ショックでたまらなかった。

人に期待をすると、結局は期待を裏切られるだけなのかな。

のどが熱くなった。

「じゃ、俺はそろそろ行くよ」

そう言うと彼は立ち去った。

「ありがとー！」

わたしはそう言うことしかできなかった。

名前すら聞くのを忘れていた。

バイクには乗らなくても、同じ学校ならきっとまた会えるよね。
あれだけ嫌だった学校が、少し楽しみにになった。

R y u t o S i d e S t o r y

「遭遇」

人と無駄な関わり合いをしたり、やっかいなことになるのが嫌で、俺は今まで困っている人を見て見ぬ振りをしてきた。

どうせ、俺なんかが出しゃばったところで、何の役にも立たないと思っていたしさ。

人を助けたのはこれが初めてだった。

あんなに感謝されたのも初めてだった。

こんな俺にだって人の助けになるんだな。

思い出すと、なんだかむずがゆい思いでいっぱいになった。

でも、バイクか……。

重かったな……。

ふっ……（苦笑）。

女の子の前で格好つけてはいたが、内心重くて投げ出してしまいたくてたまらなかった。

バイクを持ち上げる時なんて力みすぎて頭の血管が切れるんじゃないかと思ったし、潰された時だってあまりの重さに骨が折れるんじゃないかと思った。

自分でも格好悪るさ全快だと思っていたのに、格好良かったって言われたしな。

断然悪い気分じゃない。

もしバイクに乗れたら、少しは自分が格好良く思えるんだろうな。

でも、きっと祖父さんはそれを許しちゃくれないだろう。

それに勉強しないとイケないしな。

……やはり俺には無理だ。

余計なことを夢見ない。

それが俺の処世術だった。

団地の間を抜けると公園へと桜並木は続き、やがて駅前へと出る。

駅前の繁華街は春休みというだけあって、子供連れの親子や、若いカップルでにぎわっていた。

ふん、楽しそうにしゃがって。

俺には関係ないことだ。

・・・いや、決して嫉妬した訳じゃないぞ。

誤解してもらっては困る。

ただ、ちょっとうらやましいだけだ。

って、一緒か・・・。

そんな光景を無視して横断歩道を渡ろうとしたそのとき、人混みの中に場違いな黒いコートを着た男が一人立っていた。

そして、次の瞬間その男は幻のように姿を消した。

気のせいだろうか？

いや、確かに消えた。

なんだ？！

「我が同志、堀江 竜斗」

不意に名前を呼ばれて振り返ると、そこにはさっきの黒いコートの男がいた。

スクランブル交差点の真ん中、横断歩道を行く人々は何事もなかったかのように俺たちを避けて通り、そこだけが時の流れに取り残されたように感じた。

突然現れたその男に何故か驚きは感じなかった。

まるで当たり前のようにその男は存在していたから。

そして、俺は浅い眠りにも似たまどろみに落ちていく。

「君は我々の意志に従い、平凡に生きることを望み、一生を何事もなく過ごす事を望んでいたのだろうか？

それが君に与えられた役柄だったはずだ」

(おまえの親父は平凡に生きることが出来なかったから死んだんだ)

頭の中に響く声・・・。

そう、それが俺の役目だった。

「だが、君は自分に課せられた役目を忘れて、あらぬ道を進もうとしている。

我が同志、堀江 竜斗よ。

これ以上、あらぬ道を進むのであれば、我々は君を敵とみなすことになる」

俺らしさ、それは平凡に生きることだ。

俺はこれからもそうやって生きていくんだ。

それが俺に与えられた役目で、それが俺の幸せなんだ。

「本当にそれで良いのか？」

俺は突然聞こえた低い声に正気を取り戻した。

俺はこの声の主を知っていた。

目の前にその男の背中が立ちふさがっていた。

とても広く、力強かった。

そして、その男は黒いコートの男と対峙する。

「風間、先生・・・？」

「本当に自分らしく生きるのは、そんなに簡単なものじゃない。

誰かに定められた道を捨て、自分が自分であり続ける道を歩めば、世の中からの逆風をうけることもあるさ」

「そうか、風間 祐一。

君がこの少年を墮落への道へ誘ったのか。

それが君の答えというわけか」

「衝突を避けていたら何も始まらないぜ！」

「我々はもう君達を許すことが出来ない。

せいぜいその日に脅えながら生きるが良い」

そういうと、黒いコートの男は姿を消した。

俺は夢でも見ていたかのように何一つ掴めずにいた。

俺なんか理解することの出来ない、違う次元をのぞき見たようだった。

「知り合い、なんですか・・・？」

俺は先生に聞いた。

「あえて言うなら、昔別れた同志と言ったところかな」

んなことをやっているうちに、横断歩道が赤になろうとしていた。

「お、赤になる・・・！」

大股で歩く先生の後に続いて、小走りで横断歩道を渡った。

「まあ、いずれおまえが自分で選んだ道を歩むときにわかることさ」

全然わからん。

というか、何故先生がここにいるのかもさっぱりわからん。

はっきり言って状況が飲み込めずにいた。

「はぁ・・・」

「今日はいろいろあって疲れただろ。

特別に送って行ってやるよ」

というと先生は駅前に止めてあったバイクからヘルメットを投げてよこした。

「俺のV MAXでな」

これがこの先生のバイクなのか？

さっきの女の子のバイクとは比べものにならないぐらいに大きく、ごっついデザイ

ンをしている。

おもわずさっきの重さを思い出してしまい身震いする。

あの小さなバイクであそこまで重いんだから、このバイクは相当重いんだろうな。

先生はスーツ姿のままヘルメットをかぶり、バイクにまたがるとエンジンをかけた

。

ドドドドドドと、まるで地響きのような音がする。

「乗れよ！」

後ろに乗ると、ウウー——ン！　という音が鳴り、その瞬間にリヤタイヤが滑るのがわかった。

そのままバイクは半円を描き180度回転して方向を変える。

バイクってこんな動きをするものなのか？

先生は思いバイクをまるで自分の手足のように器用に操った。

「しっかり捕まっておけよ！！」

言われた時、嫌な予感がした。

先生の腰に回した手を強く握ると、その瞬間、体にすさまじい重力がかって後ろに引っ張られる。

腕と足に押さえ避けられるような風圧を感じる。

まるでカタパルトから発射する戦闘機にでも乗ったかのような気分だ。

何事かと思って先生の体の横から前を見ると、凄まじい風の中、細い針のように迫ってくる世界があった。

ふとメーターを見るとその針は時速120km/hを指していた。

んな、馬鹿な！

一瞬、小説だから出来るワザだと思わざるを得なかった。

電車の中から見慣れた風景は走馬燈のように一瞬で流れ、まるで違う世界を見ているようだった。

転けたら間違いなく死ぬ・・・。

だけど、妙なことに不安はなかった。

それだけこの先生の技術には安心感があった。

曲がりくねった上り坂をグイグイと上り、車体を傾斜させながらリズムよく曲がっていく。

まるで重さなど感じさせない力強さが不思議に心地よかった。

生まれて初めて乗ったバイクは俺にさめない興奮を残した。

「自分の頭で考えて嘘偽りのない、お前だけの道を歩むんだ」

先生は俺を家まで送るとその言葉を言い残し、再びバイクを駆って行った。

それから、Cクラスに落ちたことを祖父さんに話したら、しかられることもなくただとうなずいただけだった。

正直悔しかったけど、これからがんばれば何とかなることなのかもしれない。

Y u t u r u S i d e S t o r y

「何時か終わる夢」

今日は2年生になってから初めての登校日。

まだ、他の誰も来ていない朝の教室。

わたしは教室の窓から空をながめながら、わき上がる期待を沈めていた。

脳裏に浮かぶはこの間の男の子のことばかり。

もしかしたら、会えるかもしれない。

そう思うといってもたってもいられずに早いうちから登校してしまった。

がちゃ・・・。

その時、教室のドアが開き逆光の中から一人の少年が姿を現した。

その瞬間、わたしの心臓は口から飛び出るんじゃないかってほど大きく鼓動し、体中が熱くなった。

「あっ・・・！」

わたしは呆然となって口をぽかんとあけて、その男の子を見つめていた。

そう、突然目の前に思っていた人が現れたのだから。

ああ、なんだかわからないけど恥ずかしくてたまらない。

「君はこの間のバイクの子か」

彼はわたしの間近まで近づいて来た。

ああ、どうしよう、こんなにもドキがムネムネしている！

聞こえちゃうかも、心臓の音・・・。

息とかも聞こえたらどうしよう？

こんなにも早く会えるなんて嬉しいくてたまらない！

「きゃーっ！！」

もう恥ずかしさと嬉しさでいっぱいになって、思わず彼の脳天にチョップを食らわせていた。

「ぎょおーっ！！」

彼は頭を押さえて教室にうずくまった。

「ご、ごめんねえ！ 大丈夫！！」

全然嫌っているわけじゃないの！！

思わず嬉しくって、そうこれがわたしの愛情表現なの！！！！

ああ、もうっ！！！！」

自分で何言っているんだかももうわかんないっ！

とにかくあまりの恥ずかしさに死にそう！

「だ、大丈夫だ」

と言いながら起きあがると、もう一度念を押すように言う。

「大丈夫だから気にしない・・・ごわっ！！ ぼぶっ！！ ぼほっぼほっ！！」

いきなり彼が咳き込みだした。

ああ、全然大丈夫じゃない！！！

もしかして、わたしのチョップが秘孔とか突いちゃったのかも！

あじゃばあ————っ！！とか言って爆発しちゃったらどうしよう！？

北〇真拳殺人事件、家政婦は見ていた？！

「いやあ——！ 大丈夫っ？！」

「大丈夫だって、ただ唾が気管に入っただけだ」

「よかったあ、てっきりさっきのチョップが秘孔を突いちゃったかと思った！」

「俺はもうすでに死んでいるのかっ？！ なんてね」

わたしは思わず笑ってしまった。

彼も一緒になって笑っていた。

こんなにも楽しいと思ったのは久しぶりかもしれない。

「わたしは風間 夕鶴っていうの。

きみは？」

「俺は堀江 竜斗。

今日からCクラスだ」

「竜斗か、良い名前だね。

これから一緒にがんばろうね、竜斗！」

「ああ、こちらこそよろしく」

これから竜斗と一緒にのクラスで勉強できると思うと、嬉しくてたまらなかった。

こんな時間がずっと続けばいいのに。

わたしの心のどこかには、また独りになってしまうような、そんな不安があった。

「じゃ、俺は新しい学生証をもらいに職員室に行って来るよ」

「行ってらっしゃい」

わたしは竜斗を目で見送った。

そのとき、竜斗と入れ替わり教室には女子の一団が入ってきた。

リーダー格のガングロの黒田と、取り巻きで脂性の脂沢に、ガリガリの骨川の大嫌

いな女子三人組だ。

わたしは一瞬むっとしたが、彼女たちと視線を合わさないように、机に座って窓から空を眺めた。

何か嫌な予感がした……。

「なに嫌そうな顔してるんだよ！」

思った瞬間、黒田が吠えた。

やっぱり、絡まれることになりそう。

嫌だなあ……。

「……」

わたしは無言のまま黒田を見た。

ガングロメイクで額にしわを寄せた黒田は、猿そのまんまだった。

「てめえ、なにシカトこいてんだよ！　なんか言えよ！」

「言うことなんか何もない」

わたしは目をそらし小声で言った。

ぱあん！！

その瞬間、頬が熱くじーんとなって、耳鳴りがした。

わたしは頬を押さえた。

気に入らないことがあればすぐに手を出す。

幼稚で低レベルな人格。

こんなやつに殴られても全然痛くないし悔しくも何ともない。

なにせわたしはこんなやつより全然考えながら生きている大人なんだから、こんなことに腹を立てても仕方ないんだから。

これも人生経験の一つなんだから。

そう思っているけど、何故かのどが熱くなって、涙がこぼれそうになっていた。

「いちいち腹立つ事言うなよ、オイ！」

あんたになくても、あたしには言うことあるんだから」

だったらはじめから言えよ。

わたしは冷静さを取り戻しながらそう思った。

「春休みはどうだった？」

さぞかしパンクしたバイクに乗るのは楽しかったでしょ。

ギャハハハハハハハハ！！！！」

黒田が笑うと取り巻きの二人も声を高くして笑った。

やっぱりバイクをパンクさせたのはこの子たちだった……。

バイクで走行中、バランスを崩して事故を起こして死ぬ自分の姿が頭の中に浮かんだ。

一歩間違えば死ぬことだってあるのに・・・。

なんでわたしはここまで憎まれているんだろう・・・。

悲しくて、悲しくて、仕方がなかった・・・。

「それはそうと、さっきはやけに楽しそうだったじゃない。

新しい友達でもできたみたいだけど・・・」

わたしはハッとする。

脳裏に竜斗の顔が浮かんでは消えた。

「あんたなんか慣れ慣れしくされて、あの子もかわいそうね。

きっと、またすぐに嫌われるわよ。

あんた、うざったいからさ」

「竜斗は、竜斗はそんなこと思っていない！！」

わたしは思わず叫んでいた。

「それでも一緒にいるとしたら、その竜斗って子も相当な馬鹿！！！！

なにせ、あんたみたいな変な子に惚れるんだからさ！！！！

ギャハハハハハハハ！！！！！！」

パン！！！！

教室にわたしのビンタの音が響いた。

そして、その瞬間、すべての時間が止まり、わたしの目の前には黒いコートを着た男が立っていた。

「風間 夕鶴よ。

邪悪なる血を引きし墮落した子。

君は自らにがこの世界に存在できる唯一の理由である役割を脱した。

君はもうこの世界に居続けることは出来ない」

Last Story

「竜斗の世界」

春風に包まれた朝の職員室には、俺と風間先生の二人がいるだけだった。

「目的は何ですか？」

俺は風間先生にただ一言聞いた。

再び夕鶴と出会ったときに、俺は夕鶴と風間の関係を確認した。

そう、すべては必然的に起きたことだった。

先生はネクタイをゆるめると口を開いた。

「俺の背中を見て育ってきたあいつは、流れにとらわれずに自分の道を歩もうとしているんだ」

俺はバイクに幼い夕鶴を乗せて、様々なところに出かけている先生の姿を想像した。

先生は遠い目で窓から空を眺める。

「だが、それは型にはめられた世の中に対して否定的な行為でもある」

そう言う先生の中に初めて弱さを見たような気がした。

「時に世の中から反感を買われ、時には先入観から意味もなく傷つけられ、やがて無力感にさいなまれ世の中から孤立して行く」

先生はタバコをくわえると火をつけた。

俺は先生のワイシャツの袖から覗く傷だらけになったその腕を見た。

先生はいろいろなものと戦った来たんだと思った。

世の中から、自分から。

「いくら強がったとしても、人は一人で生きていけるほど傲慢な生き物じゃない。

人は誰かに存在を認められないと自分すら維持できない弱い生き物なんだ」

俺も夕鶴も、それは先生だって一緒なんだ・・・。

「俺はこうまでして夕鶴を見守ってきたが、それもいつまでも続けられる事じゃない。」

だからお前にずっと夕鶴のことを見守っていてやって欲しいんだ」

俺は風間の中に自分の父を感じずにはいられなかった。

それは今まで先生を見て感じていたことだったが、あえてそれに気づかない振りを

していたことを思い出した。

「それが俺のためでもあるんだな」

俺は思わずそうつぶやいた。

先生は笑いながら言う。

「お前は俺が思っていたとおりの奴だな。

俺の与えたきっかけを逃さず、自分の道を歩もうとしている」

先生は自分の事をちゃんと見ていてくれたと思うと、俺は何故か目頭が熱くなった

。

先生のことを本当の父親のように思えて仕方なかったから。

「そろそろ” 奴 ” が来る」

先生がそう言うと、俺は以前会った黒いコートの男を思い出した。

「最終的に夕鶴を守るのはお前だ。

もし、世界が夕鶴の存在を否定したとしても、お前が夕鶴を否定さえしなければこの世界から夕鶴は消えることはない。

これから先はお前の意志で歩くんだ！」

行かないと！

俺は拳を握りしめると教室へと走った。

ヤツが夕鶴を否定する存在、敵だと直感的に感じた。

「夕鶴！！」

俺は叫びながら教室のドアを開け放った。

黒いコートの男が夕鶴に手をかざしている。

夕鶴は足の先から徐々に薄れ存在が消えかかっていた。

一瞬、胸がどきんとしたが、まだ大丈夫だ！

「夕鶴を放せえ！」

黒いコートの男に殴りかかると、その瞬間男は姿を消した。

「言ったであろう。

あらぬ道を進むのであれば、我々は君を敵とみなすと。

君もまた君の父親のように我らに背を向けて、世を去るというのであれば仕方がない」

声のする後ろを振り返るとそこに男がいた。

俺は男の言葉に祖父さんが口にしていた言葉を思い出した。

(おまえの親父は平凡に生きることが出来なかったから死んだんだ)

そして、全てが繋がった。

「お前が父さんを殺したのかあ！！！！」

俺は叫びながら男に殴りかかった。

だが、男の掌から放たれた衝撃波により、俺はすっ飛ばされててしまう。

「ぐああああっ・・・！！！」

俺は叫び声をあげ机を次々にななぎ倒しながら壁に激突した。

どおん！

瞬間、教室が大きく揺れる。

体中に激しい痛みを感じ意識がとぎれそうになった。

ものすごく胸が痛く気持ち悪くなると、俺はごぼっと血を吐き出した。

それでも立たないといけないんだ！

俺は体中から血を流し、吐き気のとれない胸を押さえながら立ち上がった。

圧倒的な力を持つこの男に、何の疑問も持つことはなかった。

この男は俺たちの敵、ただそれだけだから。

「そんなに消えたいのなら、君から消えるが良い！！！」

男が俺に向けてに手をかざした。

くそっ、あれをくらったら、俺も夕鶴のように存在を否定されて消えてしまうっ！

俺はよけようと思ったが体が思うように動かず、その刹那、光が俺を包んだ。

「俺は消えるのか・・・？」

俺は自分の手を見たが、存在が薄くなってもいなかった。

ふと、前を見ると、すでに透け出し存在の消えかけた先生の大きな背中があった。

「先生っ！！」

自分が傷つけられる以上の恐怖感が俺を襲った。

俺は先生に触れようとするが、その瞬間に先生の存在はこの世界から消えた。

「自分の意志を貫いた男の末路がこれか。

では、その彼が愛し守りつづけた娘も消えるが良い！！」

ハッとしたときすでに男は夕鶴に向けて手をかざしていて、次の瞬間には光が夕鶴を包み込んでいた。

そして、光と同時に夕鶴は存在を消された。

「うおおおおおおおおおっ——————っ！！！！！！！！」

誰かの叫び声が聞こえていた。

俺は自分からその声が出ていることに気が付かなかった。

涙が止めどなくこぼれる。

誰よりも俺のことを解ってくれて、本当の自分を教えてくれた先生。

はじめは嫌なヤツだと思っていたけど、それは本当に俺のことを思っていてくれたからなんだって後で解った。

俺は先生の中に、自分らしく生きて死んだという父さんの姿を重ねていたんだ。

そして、自分に素直に生きていて、俺に人から感謝されることの喜びを教えてくれた夕鶴。

きっと、夕鶴といて楽しいと思ったのは、初めて自分から何かをしたからだと思う。

俺は自分にとって大切な人を、一度に二人も失った……。

夕鶴……。

俺、本当は一緒にバイクに乗れたら良いと思っていたんだ……。

一緒にいろんなところにいけたら、楽しいだろうって思っていた……。

勉強だって本当は好きじゃなかったんだっ！

大学に行って、一流企業に就職する事なんてどうでも良かったっ！！

本当は他にやりたいことがあったけど、失敗するのが怖かったんだ……！！！！

俺は自分を平凡に生きるという型にはめて、何一つやりもしないうちから新しい自分に諦めて、そんな意気地のない自分を人のせいにして、自分に言い訳をしていたんだ……！！！！

もう一度、もう一度夕鶴に会いたい！！！！

会って一緒にツーリングに行きたいんだ！！！！

お願いだから、消えないで夕鶴！！！！

俺を独りにすんなよお—————っ！！！！！！！！！！

そのとき、俺を中心に光が生まれて教室全てを飲み込む。

その光によって教室は元の姿へと戻る。

崩れた机は元の位置に戻り、俺の傷は癒え、そして消えていった人もその姿を現した。

「竜斗おっ！」

夕鶴が俺に抱きついた。

夕鶴を強く抱きしめると涙があふれた。

「また会えて、また会えて、本当に良かった……」

俺は声にならない声でそう言った。

「欲深き人間よ、その欲で世の摂理に刃向かうというのなら、いつか我々はお前たちに報復をすることだろう」

黒いコートの男がいう。

「それでも、俺たちは負けない。

自分を信じているからな！」

先生が言うと、男はフッと姿を消した。

「我々は何度でも、お前たちの前に現れるだろう。

我々はお前たちに対する世の中の流れそのものだから」

教室に男の声が響いた。

「たとえ他の誰かに否定されても、わたしは生きていけるよ。

だって、竜斗がいてくれればわたしはそれで良いから」

E p i l o g u e

「夕鶴の世界」

わたしはNSR250Rに乗って、くるくると曲がりくねった峠道を上っていく。

葉を茂らせた木々の間から真夏の太陽がちらちらと顔を出す。

真夏でも峠の空気はひんやりとしていて気持ちがいい。

ちよくちよくとバックミラーに目をやると、黒いVT250スパダがわたしのすぐ後ろに付いて来ている。

さすが、わたしが見込んだだけあって、初心者とは思えないようななめらかな動きをする。

こんな時、やっぱり思う。

男の子ってカッコイイなあって。

でも、まだまだ全然わたしの方が上手だけど。

と思っていたら、コーナーでインからスパダに追い抜かれた。

わたしは啞然となった。

スパダのライダーは片手をあげるとピースサインをして見せた。

ああっ、もうっ！！ くやしい！！

初心者に抜かれるなんて！！

コーナーでしかもインから！！

一番抜かれちゃいけないパターンじゃない！！

追いつかないと！

そう思ってアクセルをふかすけど、低速コーナーの連続じゃ低速トルクのない2ストは不利で、トルクフルなVツインのスパダとの距離がどんどん離れていく。

これはマシン特性の差なの？

それとも・・・？！

結局、山頂まで追いつく事はなかった。

「なんでわたしより速く走るの！ ばかっ！！」

わたしはヘルメットを脱ぐとスパダのライダーを叩いた。

「遅いほうが悪いんだって！」

スパダのライダーがヘルメットを脱ぐと、伸びきった黒髪が風になびいた。

「竜斗、すっかり髪のびちゃったね。

ロン毛だよこれじゃ」

「夕鶴のおじさんだって大差ないって、しかも無精ひげスゴイし」

わたしの頭の中にもやもやとお父さんの顔が浮かぶ。

なんだか、竜斗ってば最近お父さんに似てきた気がする。

「お父さんはカッコイイから良いの！」

「いい加減、ファザコン治せよな」

グサッ！

竜斗ってば相変わらず痛いところつくわ。

「見ろよ、眺めが最高だ！」

わたしは竜斗が指さした方向を見た。

ビルのジャングルに覆われた私達の住む街が一望出来て、地平線がどこまでも続いている。

「きれいだね！」

わたしは落下防止の柵に体あずけると風に黄昏れた。

夏の水分を含んだひんやりとした風が気持ちがいい。

「ああ、こんなに景気がきれいだと思ったのは初めてだ」

「それが何故だか教えてあげようか？」

「どうしてだ？」

竜斗はあどけない顔でわたしを見る。

「竜斗は初めて自分の目で世界を見たからよ。

誰の目でもない、竜斗自身の目でね」

わたしは竜斗の顔を見てほほえんだ。

「そっか、これが俺の世界なんだな」

竜斗は優しい目をして、その街、私達の住む世界を眺めていた。

そんな竜斗を見ていると、優しい気持ちでいっぱいになる。

「よくできました、ご褒美！」

そう言うと竜斗の頬にキスをした。

ああっ、やった自分が恥ずかしいっ！！

竜斗は真っ赤になって固まって、展望台から落ちそうになったのは言うまでもない。

こんなに楽しくて幸せな時が過ぎせるのも、わたしが本当の自分でいられるからだよね。

それを教えてくれたお父さん。
弱いわたしを支えてくれる竜斗。
ありがとう、とっても大好きよ！